

森劇スタディー 12月の会 ～・今後に活かしたい コロナ禍での芸術祭(12/6)の振り返り・～

- 時 : 2020年12月17日(木) 10:00~12:00
- 場 : 津市白山総合文化センター 第一研修室
- 参加: 井谷、市川、伊藤、笠井、坂口、中川、長野、深田
*意見の記録: 笠井 まとめ資料: 長野

- ① 身体教養体操
- ② 長野からのメッセージ

本番が終わって10日、ようやく「無事開催できました」といってよいのか?と思う。できることを準備しながら過ごし開催にたどり着いたわけですが、終えてみてコロナ禍での開催のプレッシャーがあったこと、舞台というものが「会いたい」をかなえる場であること、多くの人の中に終息しないコロナのプレッシャーが蓄積されて飽和状態になってきていることをの3点に触れたと振り返ります。

それで、12月のスタディーは通常の芸術祭振り返りではなく、コロナによって更に浮き彫りになってきた源田の抱える問題を、とりとめもなく話してみる時間にしたいと思います。

- ③ とりとめもない話題

(1) コロナ禍での芸術祭を終えて通常にはない気づき等について。

- ◆コロナの影響がいろいろ言われている時期だったが、多くのお客様が参加した。
- ◆「行こうかなと思ったけれど、怖くて行けなかった」といった意見も聞けて、来てくださった方は来場にあたり、例年と違って決心してきてくださっていたことがうかがえる。
- ◆多くのイベントで中止になっている中で、実行委員活動は日々できることを積み重ねる中、開催を中止したほうがよいのではないか?という意見が出ることはなかった。(ずっと不安は付きまどったけれど)
- ◆自粛でさまざまな催事が中止になる中、コロナ感染症対策に配慮しながら開催したことはすごいと思った。イベントの規模にもよるが、先生の努力、みんなの努力、みんなの協力で、一步進まないとい何も始まらないと感じた。
- ◆対策をして開催することはよいことだと思う一方、お誘いの声掛けに躊躇した。声をかけることで迷惑がかからないかと思いつらかった。
- ◆来てくださいという声掛けに 今までになく気を遣うことが多かった。
- ◆大三の春と秋のまつりはコロナの影響で参加者少なくして祝詞をあげるだけだったが、舞台を見て舞台のようなまつり、昔のまつりが大三神社でもできたらいいと思った。本来まつりはやりたいというものなのだった。
- ◆来場者の感想ですが、時間は短かったけど良かった、本来のまつりの在り方を教えてもらったという感想を伺った。
- ◆友人にポスター、チラシを頼んだが、「こんな時期に?」と思われるのではないかと気をまわしすぎた。結局いろいろ考えた末に、ポスターチラシを回収した。

—— (1) から森劇として頭に残しておくこと ——

- ◆ 参加する・しない、依頼する・しない、など何となく行ってきたことを自分の考えに触れる場面があったことから→当たり前にあるという常識は今後無いと考え、一つ一つの活動を更に丁寧に、未来の豊かな地域につなげられるように考えをめぐらせる必要があること。
- ◆ 地域の“まつり”のあり方に今一度立ち戻りたいこと。

(2) これから先、劇場が果たしていける役割とは？

- ◆ 1. もう少しゆるく関わりながら、言える、気づける場所になれば。
- ◆ 2. 劇場、文化は人の心を豊かにする。今は損得しか考えない世の中になってしまっているが、心豊かな人間を作るために必要。

————— (2) から森劇として頭に残しておくこと —————

- ◆ 1. は、これからの劇場の役目
- ◆ 2. は、永久的な劇場の役目

(3) 舞台出演者アンケートの中に出てくる「やりきった」という意見について。

市民参加の公共舞台活動として、「やりきる」経験の意義や「やりきる」ために必要なことは？

- ◆ 子どもたちの仕舞の上達ぶりが素晴らしかった
- ◆ 舞台創作に関わってみてほしい。何かを作っていく、責任をきちんと持つこと、共有することは日常にない体験空間となる。
- ◆ 山神役のお二人が素晴らしかった。(かわいい)
- ◆ 楽しい、ほめてもらう・・・自分の好きなことだけをするのは公共事業としての活動に当てはまらない。目的の共有必要。
- ◆ やろうと決めた決心。やらなくちゃヤバイ、という追い詰められた感覚は大切。
- ◆ 子どもたちは、土壇場に追い詰められるという機会があまりない？土壇場で能力が発揮される、育つ。
- ◆ 子どもの反応が2分化してきている。例でいうと、新しいことに出会った時、『どうのことだろう？？？』と思考を働かせる子どもと、『ああ、それ知っている!!!』と情報から判断してしまう子ども。
- ◆ 大人も便利な世の中で同じような状態になっているのではないかな？

————— (3) から森劇として頭に残しておくこと —————

- ◆ 昨年の芸術祭後に共有したことに繋がる。

「遊びをせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん

遊ぶ子どもの声聞けば わが身さへこそ揺るがるれ。」 (梁塵秘抄より)

これは、言葉で共有するものではないと思いますが、子どもたちの生き生きとした笑う声をエネルギーに、大人が一生集中して遊ぶことをやめず、他者と協力し合うことをたのしむことを忘れないこと。これは、プロフェッショナル市民となっていくたのしい修行のようだし、舞台活動は、忘れないでいることを助けるし、森劇メンバーが実践し、多くの人たちにその楽しさを伝えることが役割を果たしていくことに繋がっていると感じます。 やる時はやる！という行動ですか？面白い。

【注】 下記2点は時間切れとなりました。

(4) 里山ばんざい芸術祭独自の周知方法・・・？

(5) 芸術祭実行委員(ばんざいチームメンバー)は、コーディネートを練習・学ぶことをしていきたいがそろそろ部門ごとにチャレンジしてみてよい時期に来てるのではないかな？・・・どうでしょう？

●まとめ●

コロナ禍にももらったこの思考の時間を活かして、森劇次のステップを春までに整理しよう。